

大学におけるアクティブ・ラーニングが学生に与える影響 -半構造化インタビュー調査を用いて-

スポーツ経営組織学ゼミナール 1314004 伊藤 史

1. 研究動機・研究目的

現在、初等中等教育はもとより、大学等の高等教育においても、従来の教育とは発想の異なる根本的な改革が求められている。2018年度に予定されている学習指導要領の改訂に際し、幼稚園、小学校、中学校においては、これまでの「生きる力」を育む教育をさらに一歩進めた「主体的・対話的で深い学び」が目標として掲げられ、現在、周知・徹底されている最中である。高等学校も含めて、目下、今後数年の移行期間が設定され、2022年までに初等中等教育における新学習指導要領の全面実施が予定されているところである（文部科学省, 2017）。

このような気運のなかで、近年、アクティブ・ラーニング（以下、適宜ALと略記）は、偏差値偏重の詰め込み教育でもなければ、ゆとり教育でもなく、上記の「生きる力」を育むための「能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法の総称（文部科学省, 2012）」として注目を集めてきた。本論では、先の言及にもあるように、現在のAL導入の流れが欧米圏を含めた「高等教育の大衆化」という構造的転換に基づいていたことを十分に認識し、日本国内の動向だけではなく、世界的な流れの中で改革の妥当性を吟味する必要があると考えたい。その前提のもと、ALの先行事例とされる欧米において実際にALに基づく教育を体験してきた留学生たちの声をインタビューデータとして集約し、その教育的意義を明らかにすることができれば、日本の大学の授業においても今後さらにALを取り入れる気運を高めることができるのではないかと期待できる。

2. 研究方法

<調査対象>

首都圏の大学に通う、欧米の大学からの留学生（n=10）

<調査期間>

2017年10月

<調査方法>

インタビュー調査

・半構造化インタビュー

<分析方法>

KJ法によるグループ編成

3. 主な結果と考察

大学におけるアクティブ・ラーニングは学生の、①自己管理能力、②課題対処能力、③コミュニケーション能力、④リーダーシップ力、⑤キャリアデザイン能力、の5つの能力に影響を与えることが明らかになった。

4. 結論

本研究では、大学におけるアクティブ・ラーニングが学生にどのような影響を与えるのかを明らかにすべく、調査を行った。その結果、大学におけるアクティブ・ラーニングは学生の、①自己管理能力、②課題対処能力、③コミュニケーション能力、④リーダーシップ力、⑤キャリアデザイン能力に影響を与えることが明らかとなった。大学教育におけるALの理論的な研究はいくつもなされてきたが、実践的な研究はまだ少ない。本研究でALの先行事例である欧米で教育を受けた留学生たちを対象にし、実践的な取り組みに応用するにあたっての可能性と課題を明らかにしたことで、今後の日本の大学教育の一助となれば幸いである。

しかし、本研究では大学におけるALが学生に与える影響のうち、あくまでも一部を明らかにしただけである。日本の大学の授業においても今後さらにALを取り入れていくためには、ALの教育効果に関する実証的研究のさらなる蓄積が必要である。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、指導教員である水野基樹先生から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。スポーツ経営組織学ゼミナール16期生9名全員の卒業論文の添削は大変ご負担であったと思いますが、丁寧な添削をしてくださり本当にありがとうございました。水野先生には、普段のゼミ活動や就職活動においても温かいご指導を賜りました。至らない点も多く、たくさんのご迷惑、ご心配をおかけしましたが、水野先生のご指導・ご鞭撻のおかげで充実した大学生活を送ることができました。本当にありがとうございました。また、山田先生、スポーツ経営組織学ゼミナールの院生の方々にもたくさんのご指導をいただきました。お忙しい中相談に乗ってくださり、とても感謝しています。本当にありがとうございました。インタビュー調査にご協力いただいた皆様にも感謝しています。皆様のご協力がなければ本論文の完成まで辿り着きませんでした。お忙しい中快くインタビューに協力してくださり、厚く御礼申し上げます。

私は順天堂大学の4年間でかけがえのないものをたくさん得ることができました。私と関わってくださった全ての方に感謝を申し上げます。